

## 季節に君は

風が吹く

掌が記憶を受ける

すると

蝶の流す羽根の煌めきが空に充ちる

世界が夢を吹き出す空の悲しみの

愛が圍繞する夕暮の街路を

君は求め歩きはじめる

風が煌めく

皮膚が幻想を受ける

すると

蜻蛉が飛ぶ軌跡が空に充ちる

日々が草原に匂う郷愁の

祭りの記憶が君を圍繞する社を

君は求め歩きはじめる

風が語る

意識が妣の国を受ける

すると

屈折する雲の変形が風景を覆う

囁きが大気を埋める国の

時間が消える澄んだ世界の

君は求め歩きはじめる

風が囁く

伝説が時間を受ける

すると

風景の混合が人々を引き裂く  
歴史が母の微笑みに対峙する  
峠道の登攀に異層に賭ける意志を  
君は求め歩きはじめ

風が沈む

重い大気が地表を埋める

苦い大気が世代を埋める

思想が人を空洞化する

世界が情念を腐食する

意識が夢を墜落する

そして

愛しすぎる他者への圍繞する羞恥の時

ぼくたちの時代のため

風景を君は超えようとする



ぼくらが愛を信じた日々のために

春になった日

蝶の羽根から夢幻が飛び立つ日

鱗粉に噎せる 空の青さに

いつからかぼくらの愛は始まっていた

ぼくらはいつも街の十字路で出会う

授業を終えた君は山の手の学校から帰り

工場から帰るぼくは山の手の学校へ向かう

そして

俯き眼を伏せ歩く君

君の世界をぼくは盗み目に意識する

露を大気が帯びる暗い日

紫陽花が皮膚を重くする日

風に噎せる 空の青さに

いつからかぼくらは微かに瞶<sup>み</sup>めあっていた

学校の帰り君は十字路で傘に倒される

羞恥に染まる君の頬に街路が恥じる

意識に押されぼくは傘を拾う

そして

匂いの満ちる舗道の上で

君の世界をぼくは覗きこんだ

爽やかな秋の日

意識が遠くに響く日

風に想いをおくる眼差しの空に

いつからかぼくらは指を触れあっていた



ぼくらが愛を信じた日々のために

郊外を散歩しながら君は語る  
絵に耽溺した幼い記憶を君はひらき  
異質の世界を覗きあうぼくらの幼い思想  
そして

樹木の流す死の不安の中で  
ぼくらは肌のぬくもりを確信しあう

ぼくらの世代から消えない時代の歪みに  
夏の陽が照りつけていた日々

ぼくらは砂浜を歩いた  
陽に透ける君の意識

水平線に賭けるぼくの情念

遥かに見える父たちの世界

遥かに見える母たちの記憶

ぼくらは祝福されて砂浜を歩いた

砂は重い

砂は飛ぶ

砂は光る

砂は流れる

砂は滑る

砂は跳ねる

すると

砂は瞞<sup>み</sup>める

砂は思惟する

砂は愛する

そして砂は悼み

伝説の世界をぼくらに充たす



## 虹のかなたへ

虹のかなたを歩いていく  
遠い過去にあるような  
近い心にあるような  
揺れることはない冷ややかな  
景色のなかにある  
林のなかにある  
畦道のなかにある  
虹のかなたを歩いていく

忘れた世界のなかに  
薄い霧の湿った厚い葉をぬけてきた光の乱れに  
萌え始めた愛

水族館のむこうの  
触手のとどかない水槽のむこうの  
明るいきらめきの砂地の上に  
忘れてきた閃きがあつて  
メルヘンの箱があつて  
虹のかなたを歩いていく

風に靡いているのではない  
煙がかなたに流れて  
結晶した青い空のなかに  
冷ややかに透過した青い空のしたに  
ほそ毛が乱れ  
陽が戯れている細い細い皮膚  
そこに、玩具の世界があつて  
そこに、あなたの世界があつて



薄いガラス箱の世界があつて  
虹のかなたを歩いていく

赤い、白い、藍色の珊瑚のまえに  
痛々しい岩面の海辺に

肌を裂くような断層の下に  
黄ない緑の草原のうえに

ぼくが立ったとき  
ぼくのまえて世界は溶ける

そう、あのころあつたぼくのひとつの宝、葉の花のような、煌めく朝  
嬉しくつて、そして哀しくつて、ぼくの生命がはりついた木の葉  
隕石が落ちていた荒地の穴、鋭い風の吹く洞穴  
幽かな匂いのゆるる墓の下、色彩のいつも映えていた、しみるような目の色の昼、

ぼくが濡れていた夕暮れ

虹の色の断層のなかに  
含まれて水滴がある  
白い歯の微笑みがある  
と

宝石店はいつか遠い閉店をしていて  
ぼくの目は貼りついたまま  
時間の結び目をもとめるため虹の麓へいく



## 昼の光に漂う生を

ゆれて、ゆれて、ゆれる風景  
人が群れているのは  
人が死んだためではない

おびただしいきらめく光が、エメラルドの光る車が、白い笑いに溶け、  
「ざわめきが溢れ、人は群れ、透けて病み、青い空の凍る軋み、  
眼は白い影を眺め、泣き声を聞く」

陽が沈み

空が悔恨を流したとき

プラット・フォームのうえでだれかが死んだ

林が血の色に濡れたとき

舗道のうえでだれかが死んだ

蒼が空気を求めたとき

風景が描く軌跡のなかでだれかが死んだ

秋が匂いに染まつたとき

ビルディングのなかでだれかが死んだ

あるいは、眩きが、夢のかほそい世界の、呻きの底に、埋もれた顔のおくに、  
遙かな論理の木の梢に、あやうげにいる鳥、墓石に触れ、  
肌の跡を残した、求めあう掌、愛撫の渴き、蔽われた地のしたに、  
奈落に消える声のとき、率いる愛の論証に人は賭ける

甕のうえに臥した死骸

空洞な胸に

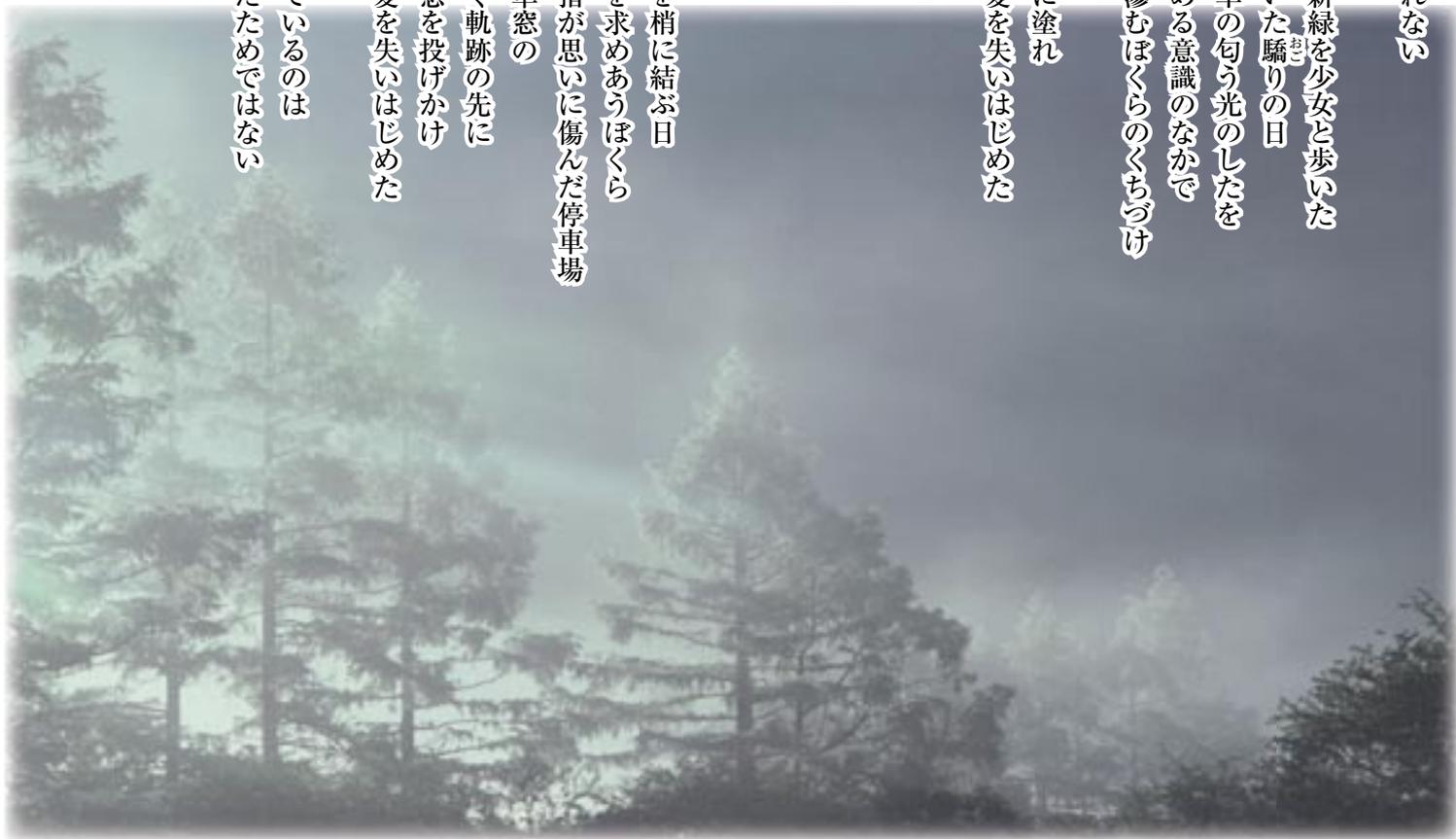
腥い臭いがする記憶の世界

状況が突き刺さってくる

風は吹かない  
湿りはない  
そこには  
死はない  
情念は溢れない

鳥の囀る新緑を少女と歩いた  
夢に傷ついた驕りの日  
ぼくらは草の匂う光のしたを  
稜線を瞞める意識のなかで  
教科書の滲むぼくらのくちづけ  
そのとき  
世界は血に塗れ  
ぼくらは愛を失いはじめた

風が記憶を梢に結ぶ日  
豊饒な愛を求めあうぼくら  
ぼくらの指が思いに傷んだ停車場  
遠ざかる車窓の  
光に煌めく軌跡の先に  
世界は概念を投げかけ  
ぼくらは愛を失いはじめた  
人が群れているのは  
人が死んだためではない



夏の谷で

夏の光が記憶をはこぶ  
意識の軋む音に空間が涙する 風景をわたる  
影に屈折する空

飛翔する鳥の墜落感をなぞる掌

谷の彩り 草原にそよぐ紫の花

勿忘草 わすれなぐさ 思考する花

花粉が思考をはこぶ 観念と実在をつなぐ橋の上

彼岸を望む夕暮の赤い悲しみに

澄んだ記憶を確かめる流れの風景

少年は実在を求め

街並の眩しい光を瞞める みづ 悼みが流れる

世界に父の観念を埋めこんだ日

支流の谷を遡行する歩みを

林の鳴き声に夢が散乱する

みんな蝉の鳴き声が記憶に突き刺さる

澄んだ流れの響き

うす緑色の背に透けた羽根の

山々に包まれる街の生の清らかさを

少女の歩みのひとつひとつが時間に埋める校庭

少年は世界を求め

谷を挟んだ木々の囁きが語りかける物語の地平

夏の空の深い青に聞き入る瞳

小さい雪片が形づくる雲の世界

うす緑色のみんなん蝉

透けた羽根が町のイメージを鮮やかにする

谷を挟んだ木々の囁き

社の杜やしろの虚空に刻印した伝説と歴史を

夏の雲のくっきりとした壁画を

小さい雪片の形づくる煌めく陽のなかの

遠くに少年の影が歩く

滅びの放射する夕暮れ

谷に点在する沢が静かさに沈むと

沢蟹の散歩の時間がはじまる

赤やおうど色の甲羅

わき腹にむらさき色を彩る甲羅

孤独を愛する君ら

一生を清らかな淡水に生きる君ら

少年の記憶に生きている君ら

神秘的な眼を世界に向ける君ら

孤独の夢を少年は歩く

遠い夏の日

少年は沢に遊んだ

少年は沢蟹と遊んだ

少年は沢蟹に戯れた

少年は沢蟹の銚をもいだ

少年は沢蟹の足をもいだ

少年は沢蟹の眼をもいだ

記憶は少年の生に突き刺さっている

歩みの音が光に沈む夕暮れ

記憶に追われる山あいの町の夏に

生きる愛に充ちていた遠い時を

遊びの愛に充ちていた谷の沢を

登りつめる足に

川の蟹よ、沢蟹よ、孤独よ

春がきた

谷川の流れば空を呼びはじめる  
すると

木々のみどり葉が色を増しはじめ

花は賑やかになる

アキタブキが花開き

オウギカズラが花開き

ラシヨウモンカズラが花開き

山は命に溢れはじめる

そのとき 清らかな水のなかに

岩穴から 小石の下からぞろぞろ動き出す

川の蟹が 海から戻ったモクズガニが動き出す



勿忘草の匂う流れに  
風景が遠い少年を描くと  
時間が夕暮れに凝集する

沢の岩の黒い影

濃縮した淀んだ大気に埋もれ

澄んだ水に沈めた手を沢蟹の鉗が咬む

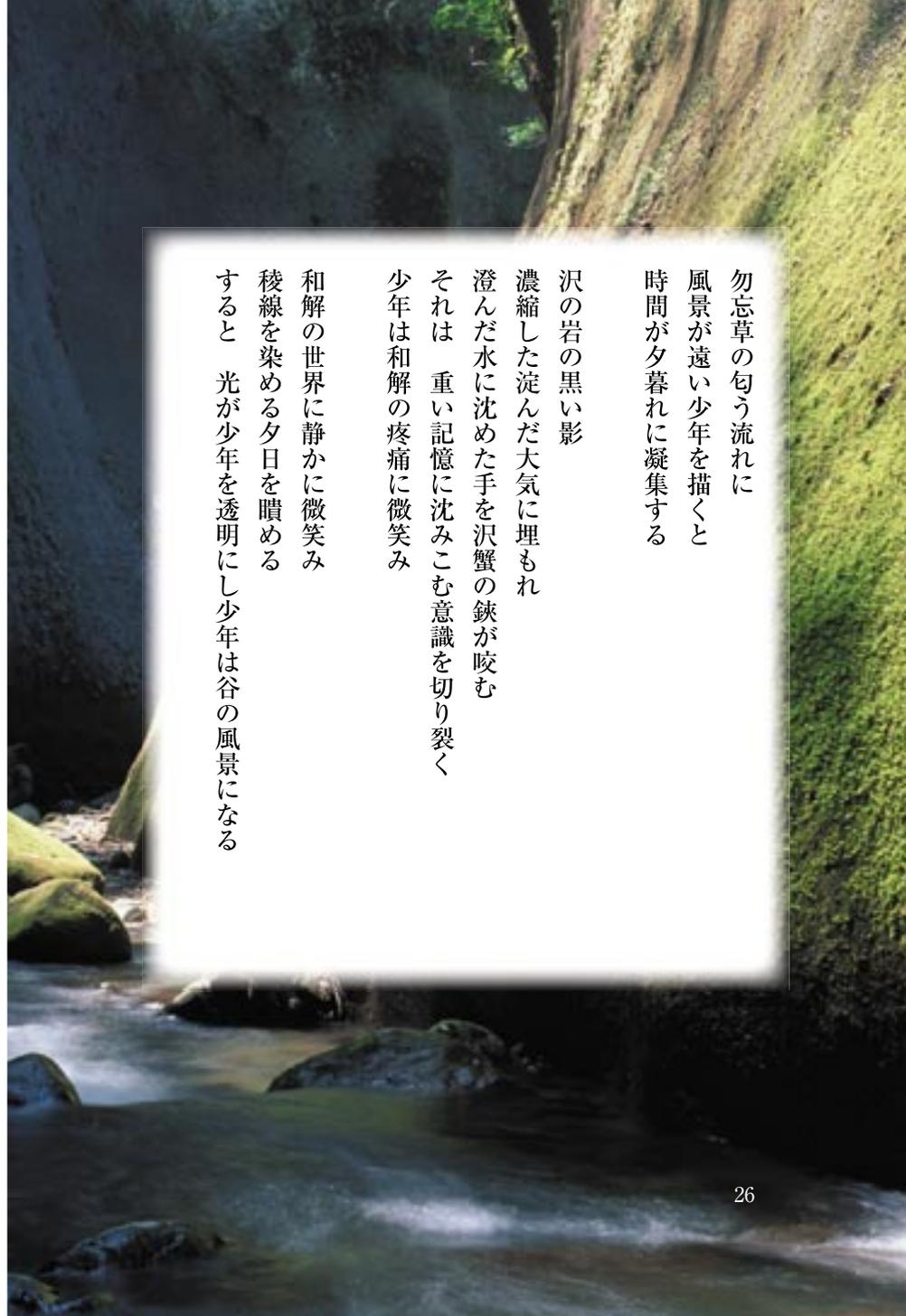
それは 重い記憶に沈みこむ意識を切り裂く

少年は和解の疼痛に微笑み

和解の世界に静かに微笑み

稜線を染める夕日を瞞める

すると 光が少年を透明にし少年は谷の風景になる



右へ左へと動き出す

川の蟹よ 蟹たちよ

『世界の形が また

人間が また意識ある生き物が 存在する以前に太陽はすでにあつた』のか

『太陽は

世界より先には存在しなかった』のか  
いったい 君たちには どちらだ

君たちは横に歩き斜面に居ることが多い

木や花の実は斜面に落ち、育ち花開いても

空へは垂直に立つ

だが

君たちの背はほとんど空に斜めに向いている

君たちの世界は独特だ

君たちはあまり群れない  
ぼつとり独りだ 君たちは孤独だ

夏がきた

森の匂いは強烈だ

谷川の水は透明に澄み 川底は風景を浮かべる  
そして

ホソバノギクが花開き

ウスユキソウが花開き

ジャコウソウが花開く

すると

沢蟹が動き出す

ぞろぞろと右へ左へ横へ横へ動き出す



沢蟹よ、君たちの世界は独特だ  
君たちだけが海へ行き、戻ることをしない  
君たちの世界は純粹だ

沢蟹よ、川の蟹よ  
君たちの眼は独特だ  
四方八方見ることができる  
だから 君たちはあまり群れない  
ぼつとり独りだ 君たちは孤独だ

夏の日 ぼくに会った沢蟹よ  
谷川で水を掬うぼくの手の下を横切った沢蟹よ  
君はぼくに「さよなら」を言ったのか  
ぼくの眼に出会った君の眼は  
かすかに動いたよ

独特の眼だったよ

沢蟹よ、川の蟹よ  
君たちは孤独に強い  
君たちの世界は純粹だ  
君たちの世界は独特だ

『太陽は  
君たちの世界より先には 存在しなかった!』



## 生の世界は

月の青い光が染める 幻想に満ちる水底  
凍てつく水 静かな流れの下 砂の広がり  
透明な揺らぎ 流れが包む岩 そして岩  
憩う岩穴

伝説が生きる清らかな水の中  
生の世界

砂に刻む軌跡の交わりが愛をうむ世界  
水に描く凝視の放物線

家族を生み 友愛を生む生の世界

それは神が摂理する愛の豊饒さに生が溢れる国  
そして

香りが漂う海の底の湧き水を呼吸する  
ずわいがにが生きる  
たらばがにが生きる  
はなさきがにの刺に流れが裂け  
けがにの柔らかな毛に水がそよぐ

麗しい山々の源の  
匂いやかな水

泉に生を浸す純白の白  
水仙が影をおとす水面  
安らかな憩いに生を深める色  
色に触れて魚が煌めく  
空が愛を囁く国

海に生まれ海に生を過ごす蟹ら

川に生まれ川に生を過ごす沢蟹

海に幼年期を過ごし川に生きるもくず蟹

純粹な生と広い視野を持つ生

生きる豊かさの生が交差する世界

ナルシスをエゴイズムの権化に説く書

「自己愛のため身を変えられた」と化粧する書  
だが

水仙の純白の世界 それは他者への愛

世界を単層に見る無知

思想をおりなす傲慢な知

美への嫉妬が生む冷笑に

超越する純白な生

屹立するナルシズム

ナルシシズム それは自己への愛

ナルシシズム それは美の愛

ナルシシズム それは他者への愛

純白は自己への愛

純白は美の愛

純白は他者への愛

それは 神の慈愛

そしてそれら実在の眼が注ぐと

世界はひたすらなほほ笑みと充足に溢れる

